

『余地』

～相談業務を楽しむ方法〇～

<隠された答案用紙>

杉江 太朗

～専門家による専門的な診断～

私の職場は、子どもの福祉を専門的に扱う行政機関である。その業務に対社会、対家族に対して調査するということがある。調査をする目的は、子ども自身のことや、子どもが置かれている環境、子どもが属する社会、家族を知ることである。

例えば児童相談所運営指針では、社会診断、心理診断、行動診断、医学診断などと分類されている。それぞれの診断を総合して、援助方針を決定すると書かれている。それぞれの中身については、厚生労働省のホームページなど見て頂けたら良いと思う。そういった解説をすることがここでの目的ではない。

しかし、「診断」と聞いたときに一番に思い浮かべるのは、医療のことではないだろうか。医者に「(医学)診断の結果は〇〇です。」と言われるという状況は想像がしやすいと思う。一方で、医者でもない人間に「(社会)診断の結果は△△です。」と言われて、「なるほど。そうだったのか。」と反応する方がどの程度いるだろうか。おそらくないだろう。子どもを理解しようとするとき、子どものことを親と共

有しようとするときに、そうした言葉は何ら意味を為さない。また、専門書だけを読んで、診断技法を深めることが子どもを理解することに繋がるかと言われればそうではないだろう。近年、トラウマやアタッチメントなど子どもを理解するための専門的な知見が広がりつつある。しかしそのことを学習するだけで、目の前にいる子どものことが理解でき、良い援助に結びつくという保証はない。

今回は、私が出会った方々で、子どもを真の意味で子どものことを理解しようとしてアプローチされた方について紹介しようと思う。彼らの実践は、どの専門書にも技法として掲載されていない。誰にでも通用するものではなく、その場限りの技法である。しかし、どれだけ専門書を読んだとしても、子どもを理解するに当たって、その一手に勝るものはなかったのではないだろうか。

～隠された答案用紙～

施設入所中のAの家に担当のBが家庭訪問した。目的はAの親から家で生活していた頃のエピソードを聞いたり、実際

の生活環境を見たりするためである。指針に沿った表現をすると、「子どものアセスメントを行い、今後の支援に活かすため」とでも言うのだろう。

B は専門的な言葉を頼りにせず、実践の中で、子どもを理解することに長けていた。今回の訪問も、難しいことを意図していたのではなく、Aのことを知りたい一心で行われたものであった。B は一通り親から話を聞いた後に、A の部屋や A が過ごした場所などを親に順に案内してもらい、それにまつわるエピソードを聞いてまわった。B は、最後に A の部屋にもう一度行きたいと言い、親に退室してもらえないかと頼んだ。A が普段どのように過ごしていたのか、A の気持ちになってみたいと思ったそうだ。

B は A の部屋で一人になり、机に向かったり、床に寝たり、窓を開けて外を眺めたりした。

A は家で過ごしていたとき、床に布団を敷いて寝ていた。B は、A が寝ているときにどんなことを思っていたのかと思い、床に寝転がった。そのときに押し入れの上にある天井に近い物置スペースが気になった。そのことを A の親に伝えると、親はその場で椅子に乗り、物置の中を確認し始めた。その奥からは、A が隠したと思われる大量の答案用紙やプリントが見つかった。

A の親は、A がそこに答案用紙やプリントを隠していたことを初めて知ったの

である。A の親は、涙を流しながら、B に対して、A のことを知ろうといていなかった、隠していたことにも気付いていなかった、本当に私は、何をしていたんだろうと話したらしい。B はその言動を見て、A の親もこれから変わっていくだろうと確信したそうだ。

～見つかった答案用紙がもたらすもの～

このエピソードは、子どもが結果の悪い答案用紙を親に見せることが出来ず、しまい込んでいたという話ではあるが、その場にいた大人（当の子ども本人はその場にはいない）の気持ちの変化や気づきという点ではそれだけの話で終わらなかった。

A のことを知ろうとしたからこそ、B は、A の部屋で実際に A が体験したように過ごし、その場に寝転がった。その結果、その物置が気になり、そのことを A の親に伝えた。A の親もそのことを聞いたからといって、その場で確認する必要はなかったはずである。B も中を見るように指示をしたわけではない。しかし、A の親はその場でその物置を確認し始めた。そのときのことを後から A の親に聞いたところ、B が何を言うのかと不思議な気持ちにはなったが、そういえばその棚には何があるのだろうかと気になったそうである。そして、A の親が隠された答案用紙を見つけ、A のことを全く知らなかったと過去の自身の関わりを振り返るきっかけ

になったのである。

そして、このことは、答案用紙を隠していたAの当時の気持ちやだけでなく、もっと以前からの自分たちのAに対する関わりや思いを振り返り、整理することに繋がっていった。

実際に、Aは自身の感情を語ることが苦手で、特に親に対しては、自身のネガティブな感情を押し殺すように見えていた。一方で、親は本児に少しでも良い会社に勤めて欲しいと思い、過剰に期待をかける部分があった。このことを、例えば、「親の過剰な期待に沿えない自分を認めることが出来ず、短絡的に答案用紙を隠すと言う方法でその場を逃れ、その行動が継続していったと推察される」など専門家風に伝えたところで、何の意味もないだろう。そのことを言われて、涙を流す親がいるだろうか。どんな証拠があって、そんなことを言うのかと反発を買うのがオチである。

～その子なりの答案用紙を見つける～

子どもを理解するためには、「家庭訪問を行い、子どもの部屋に寝転がる」とか「物置の中に答案用紙が隠されていないか確認する」なんてことは、マニュアルには書かれていない。寝転がり療法や、答案用紙発見理論なんてものも聞いたことはない。

この方法は、Bがこのタイミング、この場限りでしか出来なかった方法である。

そして、おそらく、Bは特別なことをしたとも思っていないはずである。普段のように、Aのことを知りたいと思い、Aの目線からは何が映っているのか、そんなことに興味を持ちながら関わっている日々の一コマであろう。

マニュアルには書かれていないが、子どもを知るための方法は多様にあることをBのこの話から学んだ。しかし、これは、子どもを知ろうとするBの主体的な関わりが導いたものであり、誰もが子どもの部屋に寝転べば良いというものではない。

子どもの目線で物事を見ろと言われることがあるが、本当の意味で（物理的な意味で）子どもの目線で見たとある人がどのくらいいるのだろうか。同じものを見ていても目線の高さが変わるだけで、見えている部分や光景は異なってくる。

子どもの生活を知ろうとしたときに、例えば、子どもの通学路を歩く、子どもの家の周りを見て回る、子どもの部屋を見せてもらう、家庭訪問に行ったときに少し足を曲げて子どもの目線で見してみる。たったそれだけのことで、普段の面接や情報収集では得られないナマの情報を得ることが出来るかもしれない。子どもの生活空間には、その子どもなりの答案用紙、つまりは、子どもを知るためのきっかけやヒントが散りばめられている。そのヒントに気付けるかどうかは、Bのように子どもに興味を持ち、想像を働かせるかどうか作用するのだろう。

と言いながらも、それだけの余裕が、援助職者の方にどのくらいあるのだろうか。情報を集めたり、調査をしたりする前に、判断や決断を迫られることが多いのではないかと思う。また、子どもの情報も答案用紙を隠していたかどうかは後回しで、というか誰の目にも止まらず、問題行動があるか、発達課題があるかなどが優先されてしまう。もちろん大切な情報なのではあるが、私自身は、その子どもなりの「答案用紙」を見つけられるかどうか重要な気がしてならない。目まぐるしい日々が過ぎてはいるが、そういった情報に目が向けられるような余裕を持って関わりたいと思っている。